

## アメリカ社会における酒場の盛衰 ——ポストベラム期から全国禁酒法成立まで——

岡 本 勝

### はじめに

アメリカ合衆国（以下、アメリカ）において、禁酒法運動をテーマにした歴史研究がこれまで数多くなされてきた。その中で、酒類を販売する場所——主に酒場——は否定的に描かれることが多く、特に19世紀末以降の禁酒法運動に関して言及される場合、そこはさまざまな悪徳と結びついた閉鎖されるべき場所として扱われた<sup>(1)</sup>。つまり、酒場は過度の飲酒を引き起こすだけでなく、売春やギャンブルなどと強く結びつき、さらには腐敗まみれのマシーン政治の温床にもなったとする見解が、繰り返し述べられてきたのである。

その一方で、酒場が地域の住民に対して果たした役割については、ごく簡単に触れられることはあっても、精緻に論じられることはあまりなかった。それは、これまでの研究が史料の片寄りから、禁酒法運動家（以下、ドライ派）からの視点でなされたものが多く、またこの運動に批判的であった研究者でさえも、禁酒法がもつ独善性やそれがもたらしたさまざまな弊害——法律無視の社会風潮や密造・密輸入酒にまつわる犯罪の波など——を指摘はするが、反駁されやすい酒場に関する議論を避ける傾向にあったからだ。

確かに、世紀転換期の酒場がいろいろと問題を抱えるようになり、多数の市民から否定的に眺められはじめたことは事実であり、であるからこそ、最終的に合衆国憲法修正第18条が成立して全国禁酒法の時代（1920年～

1933年)が現実のものになった。しかし、別の視点から見れば、酒場は異なった評価を受けるべき場所と考えられる。19世紀後半、アメリカへ移民として入国してきた人びとにとって、そこはたんに酒類を販売する店舗としてだけではなく、他にもさまざまな役割を果たす地域社会の中心としても機能したのである。

先ほども触れたように、このような論点は、これまでの禁酒法運動の研究においては、避けて通られる傾向にあった。そこで、本稿では19世紀後半の酒場に焦点を当て、それが果たした社会的機能や役割をまず検証する。さらに、酒場を取り巻く環境は世紀転換期に変わり始めるのであるが、どのような変化が生じたことで酒場は衰退していき、最終的に全国禁酒法の成立によって閉鎖を余儀なくされるようになったのかも明らかにしたい。

## I：典型的な酒場

植民地時代から20世紀初頭まで、その場で飲用する場合も、また自宅などへ持ち帰る場合も、酒類の小売販売は主に「酒場」で行われた。19世紀中頃まで、そのような店舗は一般的に“tavern”と呼ばれ、通常宿泊施設を併せもっていたため、邦語訳として「酒場」よりも「居酒屋旅館」が適切であると思われる。居酒屋旅館は、生活環境が相対的に厳しく娯楽の乏しかったフロンティア社会では地域の中核的施設となり、そこに集まる客もすべての階層におよび、町の名士が農民や労働者と同じテーブルを囲むことも珍しい光景ではなかった。居酒屋旅館は、実際に多くのコミュニティにおいては教会に隣接する中心地に建てられたため、飲酒や社交以外にも、裁判、選挙の投票、コミュニティの会合などを行う場所として使用されたのである。

人口増加が著しいニューヨークやボストンなど北東部の町では、より豪華な「ホテル」が現れるようになり、宿泊施設と酒類販売の場所が分かれ

はじめた。ただし、ホテルによっては飲酒を楽しめる「バー」と呼ばれるセクションが設けられたので完全な分離にはならなかったし、また豪華なホテルと無縁のフロンティア社会では、居酒屋旅館がやはりその後も長期にわたって存続した。しかし、それでも北部の都市を中心に宿泊施設を切り離す店が増えはじめ、1850年代末までにフランス語で大邸宅の客間を意味する“salon”を語源とする“saloon”という語が、“tavern”に代わって使用されるようになった。南北戦争後に定着したこの“saloon”という言葉は、日本語では通常「酒場」と訳される。

19世紀後半のアメリカ社会で、誰が通うどのような店舗が酒場と呼ぶのにふさわしい、つまり「典型的な酒場」であったのであろうか。言うまでもなく、酒類を販売する店はアメリカ全土に存在していたが、その多くはシカゴ、ニューヨーク、ボストンなど北部の産業都市に集中した。例えば、全国に30万軒に近い酒場があり、その全盛の時代とされた19世紀末、シカゴ1都市だけで南部15州にあったすべての店舗の数よりも多かった<sup>(2)</sup>。したがって、本稿で「酒場」という場合、それは南部の農業地帯や西部のフロンティア社会にあった居酒屋旅館を連想させるものではなく、北部の産業都市にあった店舗を指すものとする。

次に、そのような都会の酒場に通う人たちについて考えてみたい。南北戦争が北部の勝利で終わり産業資本家が政治の主導権を握ると、ポストベラム期のアメリカ社会では工業化が急速に進んだ。それにともない、人びとが雇用を求めて工場や会社のある町へ移動したことで、都市化現象は加速された。さらに、慢性的な労働力不足に悩まされてきたアメリカは、多くの労働者を海外に求めたため、世紀末には主として東・南ヨーロッパからの移民の流入が、それまでにない規模と多様性をともなって起こったのである。その結果、20世紀までに住民の半数以上が移民によって占められる大都市が増え、中でもシカゴでは87パーセント、ニューヨーク市では80パーセントが「外国人」となった<sup>(3)</sup>。

ところで、都市周辺の地域には、ワスプを中心としたアメリカ生まれの

市民も多数居住していたが、彼らはどこで飲酒を楽しんだのであろうか。もちろん酒場——この場合、労働者が集まる多くの酒場と比較して軒数は少ないがより高級な店——へも足を運んだことは確かだが、中産階級化した彼らにとって、飲酒する場所は他にも多々あった。もともと娯楽を提供する場所に乏しいアメリカ社会だったが、19世紀も後半になると、飲酒も楽しめるさまざまな社交クラブが出現した。射撃や乗馬などのスポーツサークル、文学や音楽を鑑賞する文芸クラブ、政治について語り合い活動する結社、同窓生が集う友愛会などがさかんに組織された。会員を限定する傾向にあったこれらのクラブへは、主に中流階級以上の人たちが参加したのである。さらに、居住空間に余裕があった彼らは、自宅でアルコールや会話を楽しむこともできた。このように、ポストバラム期に中産階級以上の人たちは、自らの飲酒行為をより「<sup>プライベート</sup>私的」に、そして「<sup>イクスクルーシヴ</sup>排他的」に行う傾向になった。その結果、世紀転換期に酒場という「<sup>セミパブリック</sup>半公的」な場所に集まる客には、移民が多数を占める労働者階級の人たちが多くなったのである<sup>(4)</sup>。

以上のような点を考慮して、本稿では世紀転換期の典型的な酒場として、飲酒と娯楽だけを目的に中産階級のビジネスマンが多く立ち寄る繁華街とか都市交通のターミナル付近にあった酒場や、主に郊外に出現し夫婦同伴も珍しくなかった「ビアガーデン」ではなく、工場の周辺地域および移民労働者たちの居住地域——実際に両地域は近接もしくは部分的に重複する場合が多かった——にあった「<sup>ネイバーフッド・サルーン</sup>地区酒場」に焦点を当てることにする。

通常、この種の酒場へは、通りに面した正面の入り口にあるスイング・ドアを押して入る。店内には、マホガニー材の長いカウンターとそれに沿って真鍮の足置きレールが設置され、足元には噛みタバコ用のやはり真鍮でできた痰壺が等間隔に置いてあった。カウンターの奥には酒瓶やグラスがところ狭しと並べられ、壁には大きな鏡と何枚かの絵画が飾られており、その中には女性の裸体画がよく見かけられた。グラスや痰壺などの備品が大量生産されるようになり、また第4節で触れるように醸造業者による酒

場の系列化が進む19世紀末には、多くの酒場は「類似の規格化された姿」を見せるようになった<sup>(5)</sup>。

カウンターの前のワックスが十分かけられた床にはおが屑がまかれており、窓際に向かってスペースがある場合には、テーブルと椅子が数組配置された。客は1人もしくは2人であればカウンターで立ち飲みをし、それ以上の人数であればテーブルを囲む傾向にあった。ただし、アイルランド系の人びとは立ち飲みを好んだため、ボストンの酒場では、スペースがあるにもかかわらずテーブルと椅子は置かれなかった<sup>(6)</sup>。そのほか、ビリヤード台、ルーレット台、ピアノなどさまざまな娯楽を提供する備品を設置する店もあった。また多くの酒場には、正面から入るメイン・ラウンジ以外にも、別の出入り口を利用する「裏部屋」が設けられていたが、この部屋については第3節で詳しく論じることにする。

## Ⅱ：「酒場文化」を支えた要因（その1）

ドライ派による酒場に対する攻撃が徐々に激しくなるなか、1880年に約15万だった軒数は20年間に倍増するほど、酒場は北部の産業都市を中心に繁栄し、「酒場文化」と呼ばれるものを生み出した。確かに、その期間に15歳以上の国民1人あたりの無水アルコール飲用量が年間1.9ガロンから2.1ガロンへと増加したり、入国する移民も年平均約45万人を数えるようになった。しかし、これらの変化だけで酒場の軒数の激増を説明するわけにはいかない<sup>(7)</sup>。このとき、酒場の繁栄とは、客たちが飲酒だけを目的にそこへ通ったわけではなかったこと意味した。つまり、「他の施設では提供できなかった彼らが真に求めた諸々の事柄に、酒場だけが応えてくれる」という期待が、多くの客を集めることができた背景にあったのである<sup>(8)</sup>。

19世紀末の酒場は、以前の居酒屋旅館と同様に地域社会の中心に位置したが、客たちが期待し、そして酒場が応えようとした「諸々の事柄」は、より複雑で多様化するようになった。前節で論じた典型的な酒場に関して、

その事柄を分類すると、①気分転換、②食生活への支援、③社会生活上の支援、④行事・会合場所の提供ということになる。ただし、これらの事柄は、基本的に営利を目的とする酒場が行ったものであり、決して自発的な福祉的活動ではなかった点と、酒場がすべてのことを例外なく実施したわけではなかったという点を確認しておきたい。

まず第一点についてだが、この範疇へは本来酒場がもっている例えば飲酒や娯楽など、厳しい日々の生活を癒してくれる機能が含まれる。地区酒場へ通う客のほとんどは近くに住む労働者で、世紀末においてその多くが移民の一世と二世で占められていたことはすでに述べた通りである。彼らは一般に貧しく、プライバシーのない「共同住宅」<sup>フナメント・ハウス</sup>の狭い部屋に家族全員が詰め込まれて生活しており、安い賃金と長時間労働を強いられるなど、居住環境や労働条件は劣悪であった。そのような状況のなか、夜は暗く冬は寒い共同住宅では得られないくつろぎと快適さ——中産階級のアメリカ人が本来ならば家庭にあるべきと考えたもの——を求めて、労働者は明るくて暖かい「避難所」へと向かったのである<sup>(9)</sup>。

酒場に集まる客の多くは「泥酔するほど飲む意志はなく」、適度に飲酒しながら同じ民族的背景をもつ人たちや同じ職場の仲間——これらはしばしば重複する——との会話やゆっくりと流れる時間を楽しんだ<sup>(10)</sup>。労働者たちが最も好んだアルコール飲料はビールだった。しかし、時には「奢り合い」という仲間同士で、もしくは仲間になるために、順番にウィスキーの酒瓶を買って回すという飲み方が行われた。これは、「本物の民主主義が存在する酒場において、すべての人が対等であることを象徴する飲み方」で、19世紀中頃まで居酒屋旅館で行われた泥酔するまで飲む「酒宴」<sup>ビンジ・ドリンク</sup>の伝統を引き継ぐものだった<sup>(11)</sup>。このような飲み方が過度の飲酒と結びつくとして、ドライ派によって非難されたことは想像に難くなかった。

酒場は、飲酒と会話を楽しむ場所として以外にも、顧客の気分転換を図るためにさまざまな娯楽が提供される「リクレーション・センター」でも

あった。例えば、客はカード、ビリヤード、チェスなどの人と競い合うゲームができたり、ピアノやヴァイオリンをはじめとした楽器演奏、歌手を雇ってのコンサート、ヴォードヴィル、手品、曲芸が楽しめた。一部ではあったが酒場に隣接した施設を設け、ボーリングやダンスなど身体運動が楽しめるようにしたり、またボクシングの興行を行うところもあった。ただし、ボストンやフィラデルフィアなどの東部の都市では、ビリヤードやギャンブル台を設置することが禁止されたところもあり、娯楽の種類は場所によって異なっていた<sup>12)</sup>。

次に、酒場文化を支えた要因の第二の範疇である「食生活への支援」について述べてみたい。具体的に、それは「無料の昼食」(以下フリーランチ)を指すのであるが、無料と言ってもそれはグラス一杯5セントのビールを注文した客だけが得ることのできる特典だった。ちなみに、当時グラスの大きさは一様ではなく、経営者はその大きさを決めるのに頭を悩ました。また、「フリー」とはあくまでも「無料」であって、「無制限に」食べられるという意味ではなかったため、「酒に支払った金額に釣り合わない量の料理を食べようとする客」は、店の者に追い出されることもあった<sup>13)</sup>。アプトン・シンクレア (Upton Sinclair) の『ジャングル』にも「本日、熱いエンドウ豆入りスープと茹でたキャベツ」とか「ザウエルクラウト(発酵した塩漬けキャベツ)と暖かいフランクフルト・ソーセージ。さあ、いらっしやい」などという英語以外の言語でも書かれた看板が、酒場の通りに面した窓にかけられている様子が述べられている。過当競争のこの時代、酒場にとって昼間の顧客を確保するためには、フリーランチが重要な意味をもつものであったことが容易に想像される<sup>14)</sup>。

南北戦争の頃まで、労働者が昼休みに職場でビールを飲むことは黙認されていた。当時、就業日には昼前になると新参の若い労働者や駄賃を貰った子供が、“growler” と呼ばれた量り売りのビールを入れる容器——通常ブリキ缶で、多少の大きさの違いはあった——を持って、近くの酒場へ買いに走らされる姿がよく見かけられた。ちなみに、このような容器を携

えて酒場へビールを買いに行くことは、“rush the growler”（容器を〔酒場へ〕急がせる）と表現された。しかし、南北戦争後の工業化の進展にともなって、徐々に職場での飲酒を追放する経営者が増えていった。労働者たちの間で、昼休みに食事つきの1杯5セントのビールを工場近くの酒場で飲む習慣が定着し、それにもなって工場の周辺に酒場が増加した理由として、職場でのこのような変化があった。

そもそもアメリカにおいて、酒場におけるフリーランチに類似したサービスの起源は、植民地時代にまで遡ることができる。当時、居酒屋旅館の中に宿泊客に無料の食事を振る舞うところがあった。ちなみに、そのような施設は、イギリスでは「定食」とか「定食つき旅館」を意味する「オーディナリィ」（ordinary）と呼ばれ、アメリカでは南部植民地に多かった。酒場での酒類の注文にともなうフリーランチは1870年代のシカゴで始まり、酒場の乱立から生じた過当競争の中で、先ほど述べたような職場における労働慣行の変化を背景に、顧客を確保する手段の一つとして1880年代末以降全国に広がった<sup>(65)</sup>。また、5セントではあったが、実際に料金を支払うことで、「自尊心の強い人にとって屈辱的な施しを受けているという意識が取り除かれた」点は、フリーランチ流行の一因として強調されるべきであろう<sup>(66)</sup>。

すべての酒場がこのサービスを提供したわけではないし、また食事の内容も地域や酒場によってかなり異なっていた。1899年、シカゴの第17区では163軒の酒場のうち111軒でフリーランチが提供され、24軒ではフリーランチではなく10セント程度の値段でより豪華な食事——「ビジネスマンズ・ランチ実業家の昼食」と呼ばれ、通常20～35セントはするレストランでの料理よりも評判は良かった——が出されていたが、28軒では一切昼食を出さなかった<sup>(67)</sup>。ミネアポリスとセントポールでは、634軒の酒場のうちフリーランチがない店は56軒だけだったが、提供した酒場の約半数——578軒中286軒——ではチーズとクラッカー程度しか出しておらず、「ランチ」とは呼べない内容だった。そのような酒場をのぞいて、実際にフリーランチを提供した226軒で、

内容に関して「素晴らしいは11軒、まあまあ良いは138軒、まずいのは77軒」という調査結果があり、食事の質は一様でなかったことが想像される<sup>(8)</sup>。

一般的に、酒場が乱立して競争が激しい地域ほどフリーランチの内容は良くなる傾向にあり、したがって東部ではなく中西部以西でこのことは言えた。例えばシカゴ、セントルイス、サンフランシスコなどの都市では、生き残りをかけて儲けを度外視したメニューを揃えたため、採算がとれなくなった酒場もあった。競争が激しかったシカゴ第17区にあった平均的な酒場におけるフリーランチのメニューは、「ソーセージ、貝、卵のサンドウィッチ、ジャガイモ、野菜、チーズ、パン、肉料理」などで、これらの食材を購入するだけで1日30～40ドルのコストがかかることもあった<sup>(9)</sup>。また別の酒場では、「ライ麦パン、クラッカー、チーズ、ウインナ・ソーセージ、ザウエルクラウト、塩漬け肉、ポテト・サラダ、ピクルス、プレツェル（塩味ビスケット）、塩魚、ニシンの薫製、豆など」が出されたが、フリーランチは明らかに喉の渇きを生じさせ、余分にビールを飲みたくさせるような品目を並べたものと指摘されることもあった<sup>(10)</sup>。

多くの酒場では、メニューは客としてやって来る特定の民族グループに属する人を意識したものとなり、一方客として訪れる人たちにとっても、それは自らの民族的帰属意識を確認させるものでもあった。北部の諸都市で大きな集団を形成していたアイルランド系やドイツ系の人びとのために、ポテトやソーセージは必ずメニューに登場したほか、イタリア系市民にはスパゲティが、またニュー・オリンズの酒場では、クレオールの人たちのために魚介類やアフリカに起源をもつとされるスープが用意されることもあった<sup>(11)</sup>。ワスプを中心としたアメリカ社会において、平等な扱いを受けていないと感じた移民たちにとって、懐かしい祖国の味を求めて酒場に集まり、母国語で会話を交わすことは、この上もない気分転換になったことは想像に難くない。しかし、酒場へは同じ民族の人たちだけが集まったわけではなく、特に複数の民族集団の居住地区が接する地域にある酒場には、さまざまな民族的背景をもった人びとの集まる傾向が強かった。そのよう

な場所では、異民族の食文化に触れることができ、それが異文化間理解を促す要因になったことも、フリーランチの意図せぬ貢献であった。

フリーランチを準備するために、規模が大きい酒場では料理人が雇用されることもあったが、多くの場合は家族経営が基本だったため経営者の妻が中心になっており、子どもたちもそれを手伝った。昼食は午前11時頃から始まるのであるが、材料の買いつけや仕込みは早朝から行われなければならなかった。酒場は夜間だけ営業するものとする者には想像し難い話だが、20世紀初頭までの酒場、特に早朝から動きは始める工場や市場の近くに位置したものは、午前6時には開店していることが普通であった。それは、フリーランチの準備のためだけではなく、当時、就業前に飲酒をする習慣をもった人たちがいたからであった<sup>22</sup>。ちなみに、閉店時間については、19世紀末にかけて自治体ごとに午後11時とか午前1時などと条例によって決められるようになっていったが、その時間が厳守されることはあまりなかった。特に週末ほど閉店時間が無視される傾向は強く、実際に月曜日の朝まで連続して営業する店もあった。したがって、世紀転換期の酒場経営は、資本の乏しい個人事業者やその家族にとって、過酷な労働を強いられる場合も少なくなかったのである<sup>23</sup>。

酒場が提供するすべてのサービスの中で最も注目されたのは、やはりフリーランチと思われるが、当時の人びとはこれをどのように見ていたのであろうか。ドライ派は、フリーランチは腹を空かせた貧しい人たちの窮状につけこんで、彼らを飲酒という悪癖へ導くものであると警告した。このような主張は、グラス一杯のビールをも拒絶する絶対禁酒主義者によってならば理解されたであろうが、飲酒を食文化の重要な一部として持ち込んできた多くの移民労働者には説得力に欠けるものであった。すでに述べたように、酒場は営利を目的とする施設であったため、フリーランチも顧客を獲得するための手段であり、決して自発的な福祉的活動の一環ではなかった。しかし、経済恐慌で大量の失業者が出るような非常事態では、文字通り無料の食事を提供することもあった。例えば、経済不況下の1894年

の厳冬にワシントン州スポウカンで実際にあったように、多くの酒場が協力して、「炭鉱、牧場、製材所で解雇された少なくとも650人の失業者に宿泊施設と食事を無料で支給した」こともあった<sup>(24)</sup>。

いずれにしても、フリーランチが多くの貧しい人びとに飢えを凌がせたことは事実であった。あるセツルメント運動家は、「シカゴのすべての慈善団体が行った以上に、酒場は〔フリーランチによって〕貧しい人びとに食べ物を与えた」と評価しているし、「もしニューヨーク市の酒場が閉鎖されたならば、25,000人から食事が奪われることになったであろう」と論じた社会史家もいた<sup>(25)</sup>。

### Ⅲ：「酒場文化」を支えた要因（その2）

引き続き酒場文化を支えた要因を扱うが、ここでは「社会生活上の支援」について見てみたい。その一つは、「情報センター」としての機能であった。情報を得る手段が少なかった当時、そもそも酒場に集まってくる人たちの間で交わされる会話からだけでも、さまざまな情報が得られた。酒場の経営者は、数多くの客と接触したため、例えば誰かが行方不明になっているなど、地域社会で起こった些細な事件や出来事にも精通していた。これ以外にも、酒場には必ず新聞が置いてあり、その中には移民にとって読みやすい母国語で書かれたものも多かった。母国語を含めて文字が読めない人に対しては、バーテンや経営者がしばしば記事を要約して伝えてくれることもあった。また、経営者は自ら市議会議員など地方の政治家である場合が多く、地方政治に関する情報——例えば、警察官の増員があるという情報——に熟知していた。このことは、ドライ派の改革者たちで構成される「50人委員会」が作成した報告書の中でも、「彼（酒場の経営者）は最新の政治的な取り決めについての情報を最初に入手する人間である」というように言及され、客に伝わる情報の早さが示唆されている<sup>(26)</sup>。

新参の移民や失業中の労働者は、仕事の情報を求めて酒場へ行くのであ

るが、そこは彼らにとって「就職斡旋所」でもあった。ただし、求める職種によっては特定の地域の酒場へ行く必要があり、例えば船乗りや港湾荷役の仕事我希望するならば、港近くにある店の常連客になることが就職への近道だった。一方、労働者を求める経営者もしばしば工場近くの酒場を訪れることがあり、そこが就職のための面接場所になることもあった。このような点を考慮するならば、酒場が繁盛するか否かは、バーテンや経営者が客の求めに応えるだけの就職情報をもっているか、そして親切にそれに対応できるかによって決まると言っても過言ではなかった。

「情報センター」として以外にも、酒場は銀行や郵便局の機能を果たすこともあった。週末——ほとんどの労働者にとっては土曜日——に賃金を小切手の形で受け取る労働者たちにとって、それを現金化するのは容易なことではなかった。ビジネス街にある銀行へ行くには遠すぎ、また週末は閉店の店も少なくなく、さらに身元を確認されるなど銀行がもつ堅苦しさを感じたため、彼らはそのほとんどを自らが立ち寄る酒場で現金化したのである。

1908年に、イリノイ州ジョウリエットの町のある企業家は、自らが発行した3,600枚の給与小切手のうち、1枚をのぞくすべてが酒場の経営者によって裏書きされていたと語った。特に週末に現金化が集中したので、現金が不足しがちな酒場へは、そこを系列下に置いた醸造業者が融通してそれに対応した<sup>27)</sup>。さらに、お金を貸し付けてくれたり、中には現金や貴重品を預かってくれる「貸金庫」のサービスを行う酒場もあった。若き日のジャック・ロンドン (Jack London) は、無利子・無担保で、さらに酒類を注文することもなく、酒場の主人から40ドルを借りることができたと自伝に書き残している<sup>28)</sup>。

また、酒場には便箋、封筒、鉛筆、そして投函箱が置かれ、遠く離れた母国に住む家族や親戚などへ宛てた手紙の郵送まで引き受けてくれるところがあった。一方、酒場を郵便物の届け先住所として使える場合もあったが、このようなサービスを利用したのは、居住場所をしばしば変える独

身者に多かった<sup>29)</sup>。

さらに、酒場は電話やトイレ（洗面所）を必要とする人たちにも利用された。町の中に公衆電話がまだ設置されていなかった1880年代、共同住宅の住民たちは、役所や病院への緊急なものだけではなく、近くの町に住む親戚などとの連絡のため酒場の電話に列をつくった。当初、電話の加入者はかけた本数や時間に関係なく均一料金を支払っていたため、多くの酒場では常連客はサービスとして電話を使用することができた<sup>30)</sup>。

19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アメリカの町には都市化の速度に追いつかない施設が数多くあったが、トイレもその一つだった。酒場のトイレの使用料は無料だったが、何か飲み物を注文する利用者も多く、このことが飲酒を助長するとして、市当局に公衆トイレの増設を陳情するドライ派もいたほどである。

最後に、酒場の繁栄を支えた第四の要因である「行事・会合場所の提供」について見てみたい。第1節で触れたように、ほとんどの酒場には「裏部屋」が設けられており、そこは必ずしもメイン・ラウンジの奥に位置した狭い場所ではなく、二階の部屋であったり地下室であったりもした。裏部屋には通常テーブルと椅子が設置されていたが、中にはビリヤード台などを置いたところや、反対に何も置かずにダンスなどが楽しめるスペースにしたところもあった。ちなみに、ダンスホールが酒場から独立した形で一般化するのには、20世紀に入ってからのことであった。

19世紀末、公営・私営を問わず、公民館のような安価で借りられる集会場や会議施設ははまだ少なく、またホテルなどは、使用料金が割高であったため利用者は限られていた。一方、酒場の裏部屋使用料は、酒類の注文がある程度見込める場合は無料に、そうではない場合でもそれに近いものであった。このように、料金がほとんどかからず、飲み物と食べ物が常に間近にあり、また寒い冬の夜でも会合が開けたため、酒場の裏部屋は主に貧しい人たちによってさまざまな目的で利用されたのである。

この時代、酒場が裁判を行う場所として使用されることは、フロンティ

ア社会をのぞけば徐々になくなっていったが、投票所として使われることは都会でも続いていた。シカゴでは学校なども会場になったが、それでもおよそ半数の投票所は、居酒屋旅館からの伝統を引き継いで酒場の裏部屋に設けられたのであった。

このように、公的な目的で酒場の裏部屋が使用されることもあったが、通常はやはり私的な会合や行事で使われることが多かった。まず、近隣の住人たちが、例えば結婚や葬儀など冠婚葬祭にまつわるさまざまな行事を行う場所として、裏部屋を利用したことが挙げられる。結婚式そのものは教会でなされるのであるが、その後の宴席の場所として、「中産階級の人びとであればホテルの施設を借りるかも知れないが、労働者が集う祝宴の幹事は……酒場をあてにした」のである<sup>(31)</sup>。

首都ワシントンでは、常連客が亡くなると入り口に黒い布などを掲げて弔意を表す酒場があったほか、ニューオリンズでは、次のような葬式が行われることがあった。アフリカ系アメリカ人たちは、死者を埋葬する前にまず酒場に集まった。会葬者の一団は、棺と葬送曲を演奏する者たちの後を静粛に歩いて墓地まで行き、厳かな雰囲気の中で祈りと埋葬をまず終わらせた。しかし、これらの儀式が終わると様子はがらりと変わり、帰りは陽気な音楽に合わせて踊りながら彼らは酒場を目指した。そして、裏部屋では「とてつもない量の酒、食べ物、そして音楽によって死者は丁寧に扱われた」のである<sup>(32)</sup>。

冠婚葬祭以外の目的でも、さまざまなグループが会場場所として裏部屋を利用した。その代表的なものとして、まず「政治クラブ」が挙げられる。政治クラブは、例えばニューヨーク市のタマニーホールのような、政治権力を希求する特定の民族グループによって構成される都市政治マシンの地区組織として存在するものが多かった。メンバーたちは、市議員や市長選挙の時には自分たちの候補者を応援するためさまざまな活動を行ったが、その中には裏部屋——実質的な選挙運動本部<sup>キャンペーン・ヘッドクォーターズ</sup>——での作戦会議や、彼らの資金援助で候補者が開く有権者を招待しての飲食をともなったパーテ

イも含まれた。世紀転換期の大都市では、酒場の経営者がこのような政治クラブを取り仕切ったり、また自ら候補者になることも珍しくなく、禁酒と政治浄化を目指すドライ派はこの点を取り上げて酒場を問題視したのである<sup>63</sup>。

合唱や楽器演奏の同好会、運動クラブ、文学クラブなども、頻繁に裏部屋を使用した。ただし、酒場が集会場であったこともあり、これらの同好会やクラブの会員は男性だけで、それも若い年齢の者が圧倒的に多かった。決まった日時に集まり、確かに合唱したり文学について語り合ったが、会員たちは「トランプに興じたり、タバコを嗜んだり、仲間と素晴らしい時間を過ごす」など、まさに社交を楽しんだのである。19世紀末、若い男性を対象としたクラブが数多く作られ、「都市では、貧しい地区の若者100人につき一つの割合でそのようなクラブが結成された」が、それを可能にしたのは、無料もしくはそれに近い格安の料金で使用することができる施設の存在であった<sup>64</sup>。

労働組合の幹部もまた、工場の近くにある酒場の裏部屋を会場場所として頻繁に利用した。例えば1890年代のニューヨーク州のバッファローでは、69あった労働組合支部のうち実に63支部がそうであった。また、中にはシカゴの船員で労働組合総同盟の指導者だったイーヴン・パワーズ (Even Powers) のように、自ら酒場経営に乗り出す者もいた<sup>65</sup>。労働組合が会合のほとんどを酒場で開いたのには、使用経費があまりかからなかったことだけが理由ではなかった。それは、19世紀後半のアメリカ社会には、組合活動やその理論的背景をなす社会主義に対して否定的な雰囲気があり、酒場以外の施設の多くが労働組合による使用を認めなかったことも理由の一つだった。当時、労働組合の主張に対する一般からの支持は少なく、特に武装した組合員による工場封鎖を戦術に含む「過激な」ストライキは、恐怖心をもって眺められたのである。

実際、組合幹部が集まる酒場の裏部屋が、ストライキ決行にあたっての「セントラルヘッドクォーターズ」セントラルヘッドクォーターズとしてしばしば使われた。そのため、100人以上の死者を

出した1877年の鉄道ストライキ以降、シカゴでは法と秩序を求める運動が起り、その中で禁酒法運動を支持する企業家たちは、ストライキ中の労働者が酒場で飲酒すると理性を失い、一層暴力的になると訴えた。そのような主張が市当局を動かした結果、ストライキが始まると、警察によって酒場の閉鎖が強制されることもあった。また、中には社会主義者の溜まり場になっているとして、酒類販売許可証の更新を拒絶される酒場もあった<sup>60</sup>。組合の幹部は常連客であったので、彼らに便宜を図ることは経営上求められた一方、当局に監視されることでさまざまな不利益が生じたり、ドライ派の企業家には標的とされるなど、酒場にとってこのような状況はまさにジレンマだったのである。

ところで、酒場の裏部屋を利用したのは、同好会の会員や組合幹部のような男性だけではなかった。1920年に全国禁酒法が施行される以前の酒場は慣例上女人禁制となっていたため、出入りする女性がいるとすれば、それは売春婦と見なされる傾向にあった。しかし、女人禁制とはあくまでも正面のスイング・ドアから入る場合のことで、裏部屋へ通じる脇の入り口をしばしば売春婦以外の女性も出入りしたのである。売春婦以外の女性が、男性のエスコートなしにそこへ来る場合には二つの目的があり、それらは持ち帰り用の酒類——主にビール——の購入とフリーランチの飲食だった。

女性に貞節と美德を求めたヴィクトリア時代、男性に比べると女性の飲酒量は圧倒的に少なかったとされるが、このことはかなり誇張されていたようだ。実際、19世紀末の女性も飲酒しており、彼女たちのほとんどが禁酒法を支持したというのは事実ではない。ただし、飲酒するのは不特定多数の男性の目に触れる酒場のメイン・ラウンジのような半公的な場所ではなかった。中流階級の女性であれば家庭で、また労働者階級の女性であれば共同住宅の台所や中庭、そして時には屋根の上や奥まった路地で行われる「野外パーティ」など私的な場所で、酒場の裏部屋へ行って購入し持ち帰った酒類を、1人よりも近所の主婦たちと一緒に飲む傾向にあった。

フリーランチを食べる女性客は、労働者の妻や娘であるか、もしくは自らが労働者であり、友人同士や仕事仲間で作って来る場合が多かった。5セントを支払うだけで相対的に満足できる昼食が食べられることが、働く女性にとって何よりの魅力であったようだ。1905年のある日の昼下がり、ニューヨーク市の洗濯工場で働く女性が腐りかかった冷めた昼食を食べて体調を崩した。そのため、同僚が近くにあるデヴリンが経営する酒場のフリーランチを紹介したところ、さっそく女性5人がその酒場の裏部屋へ行った。その後その輪は広がり、多くの女性労働者がフリーランチの常連客になってしまったというエピソードが残されている<sup>67)</sup>。このように、酒場の裏部屋は多様な目的で、さまざまな人たちによって使用されたのであった。

#### Ⅳ：酒場衰退の理由

これまで論じてきたように、19世紀後半のアメリカにおいて、酒場はたんに酒類を販売するだけの場所ではなく、特に移民労働者にとって、そこはさまざまな役割を果たしてくれる「<sup>フア・マンズ・クラブ</sup>貧しき者の社交場」だった。この時代、大都市では「酒場文化」と呼べるものが成立していたと言っても過言ではないほど、酒場は周辺住民の日常生活に影響を与えたのである。ところが、19世紀末以降それを取り巻く状況は徐々に変化し、1910年頃から酒場ビジネスは斜陽になりはじめた。そして、全国禁酒法の発効によって、その存在は表舞台から消え去ったのである。そこで本節では、世紀転換期に全盛を迎えていた酒場が、すぐに衰退するようになっていった事情を見てみたい。

酒場衰退の第一の理由は、やはり禁酒法運動であったと思われる。そもそもこの運動は、過度の飲酒に警鐘を鳴らすプロテスタントの牧師たちを中心として、19世紀の初頭にニューイングランドで始まった「テンペランス運動」に起源をもつものだった。テンペランス運動は、集会を開催して

過度の飲酒によって引き起こされる弊害の是正を訴える説教を牧師が行ったり、小冊子やパンフレットを配布したり、また禁酒誓約書に署名を求めするなど、飲酒家個人に直接訴えかける「モラル・スエージョン道徳的説論」を手段として進められた。そもそも、テンペランスとは「中庸」とか「節制」を意味したため、テンペランス運動は本来「節酒運動」と訳されるべきである。しかし、実際には「節酒」にとどまらず、「禁酒」を提唱する運動も含まれたため、それは「節酒・禁酒運動」であった。

「テンペランス運動」が「プロhibition禁酒法運動」へと変わりはじめたのは1850年代のことだった。当時、飲酒習慣を持ち込むアイルランドやドイツからの移民が急増しており、道徳的説論だけでは不十分と考えた改革者たちは、法律による強制を手段とするように主張した。禁酒法は、基本的には酒類の製造、販売、運搬などを禁止したもので、購入や飲用行為そのものを違法としたわけではなかった。したがって、テンペランス運動から禁酒法運動への変化は、運動の標的が飲酒家から酒類関連業者へと移ったことを意味した。特に、酒場はドライ派によって「悪魔の司令部」として、改革すべき腐敗の象徴と位置づけられたため、この運動は「酒場に反対するうねり」となったのである<sup>38)</sup>。このことは、世紀転換期の禁酒法運動で指導的役割を果たした組織の名称にも見てとれる。その組織とは、1892年にオハイオ州で結成され、3年後に全国組織となった反酒場連盟 (Anti-Saloon League) という政治的圧力団体だった。この連盟は、主に二つの目標、つまり政治・社会浄化と産業の効率化を掲げて、酒場攻撃の急先鋒になったのである<sup>39)</sup>。

反酒場連盟を動かしたのは、やはりプロテスタントの牧師や教会関係者だったが、その後ろ盾となり、とりわけ財政的に組織活動を支えたのは、労働者の飲酒による生産効率の低下と労使紛争時の過激な行動を危惧した産業資本家たちだった。そして、中産階級の人びと——その多くはワスプに属す——が、追隨者として禁酒法運動を広く支持するようになった。このような酒場を巡る社会文化的対立の下で、「リスペクタビリテイ人格の高潔さ」を自認する

中産階級の人びとは自ら客として酒場へ徐々に行き難くなるのであるが、このことも、すでに過当競争に陥っていた酒場から、さらなる顧客を奪い取ることになったのである。

19世紀後半の酒場は、バーテンなどを雇用するところもあったが、家族の手伝いをあてにして行われる個人経営が主流であった。一部には悪徳な店も存在したがその多くは健全で、すでに論じたように地域住民からは一定の評価を受けていた。ところが、世紀転換期に酒場を取り巻く状況は変化しはじめ、それとともに一般市民の反感も高まっていった。この変化の背景にあったのが、酒造業者による酒場の系列化だった。そもそもその始まりは、南北戦争中の1862年に共和党政権が戦争遂行のための予算確保を目的に成立させた、「国内歳入法」<sup>(40)</sup>による酒類への課税政策であった。この政策が切っ掛けとなり、酒造業界では醸造業者も蒸留業者も、課税分をそのまま価格に上乗せせざるをえなかった弱小な者が淘汰されはじめた。

特に、酒造業界の主導権を握りつつあった醸造業者たちは、その後1880年代に、低温殺菌、ガラス瓶に王冠を組み合わせた保存方法、冷蔵貨車などさまざまな分野で技術革新があつて、全国にシェアをもつパブスト、シュリッツ、アンハイザー＝ブッシュなどの大手企業がしのぎを削る業界を形成したのである。しかし皮肉なことに、このような製造・保存技術の進歩が、人びとを酒場から遠ざける一因を作ることにもなった。もともと腐りやすいビールは、樽に詰めて出荷されていたため、一般の家庭でそれを保存しておいて消費することは困難だったので、もしビールを飲用したければ、第2節で触れたように、容器をもって酒場まで買いに行く必要があつた。しかし、上記のような技術革新の結果、世紀転換後には家庭で少量ずつ保存のきく瓶に入ったビールを楽しむことが可能になり、ビールを宅配する業者も現れるようになったのである。

また、酒造業界の寡占化が進んだ世紀末、ドライ派が酒場の軒数を減らす目的で始めた「ハイライセンス運動」が活発化し、さらに地方自治体も

財源を確保しようとしたため、酒類販売許可証の取得料金が各地で値上がりした。例えば、1880年代中頃に年間100ドル程度だったライセンス料が、20世紀初頭のミネソタ州セント・ポールでは1,000ドルに、またフロリダ州タンパでは1,750ドルに跳ね上がった<sup>(41)</sup>。

個人経営が多い零細な酒場は、ライセンス料の高騰に悲鳴を上げ、醸造業者に救済を求めた。一方、激化する競争のなか販路を求めていた業者は、自社製品の独占的販売を条件に、ライセンス料の肩代わりを含む便宜を供与することで「特約酒場」を増やした。さらに、醸造業者が酒場ビジネスへの参入を希望する者に、開店資金や備品を貸し与えて販路を拡張することで、酒場の系列化を進めたため店舗数は増え、過当競争は加速されたのである<sup>(42)</sup>。

このように、酒場は醸造業者から融資を受ければ容易に開店できた反面、すぐに利潤を挙げなければ借金を抱えたまま閉店に追い込まれたので、店主は利潤追求を最優先に考えることを強いられた。その結果、売春やギャンブルとそれまで以上に結びつく店が増え、中には年少者にも飲酒させる店も現れるなど、酒場は徐々に批判されるようになり、禁酒法運動の活性化を招いた。そして、「酒場に対する一般の反感が最高潮に達したとき」、禁酒法はまず州レベルで、そして最終的に連邦レベルで成立したのである<sup>(43)</sup>。

次に、酒場衰退の第二の理由を考えてみたいが、それは必要性の相対的低下というものであった。その原因として考えられるものは二点あり、それらは酒場に代わる施設の増加と利用客のニーズの変化である。19世紀後半の酒場は、すでに論じたように多様な機能と役割を果たしたため、多くの人たちがそこを利用した。当時、酒場以外にそのような機能や役割を果たす施設が十分に整っていなかったことも、人びとの酒場への依存を強める原因になった。この点については、ドライ派やソーシャルワーカーなどの改革者たちも気づいていた。ある改革者は、本来ならば家庭が果たすべき役割を酒場が代行している点を嘆き、「ひとたびスラムが庭園のような

美しい郊外の住宅のようになれば、人は「酒場へ行かずに」自宅の暖炉の傍らで酒を飲むだろう」と考え、急速な都市化の中で立ち遅れた居住環境を、早急に改善する必要性を訴えた<sup>44)</sup>。またシカゴでは、ハル・ハウスやシカゴ・コモنزのようなセツルメント運動によって、男性を酒場から家庭に引き戻すことを視野に入れて、共同住宅での食事の改善を目的とした料理教室が試みられた<sup>45)</sup>。

さらに、酒場が果たしていた機能と役割は、もともと酒場が行うべきものではないと確信する者たちは、それに代わるものを自ら作り出す活動を行った。例えば、著名なセツルメント運動家のリアン・ウォルド (Lillian Wald) は、「労働者組織や政治グループを引きつける酒場の階上にある会合場所 (裏部屋) の悪影響を危惧して」、ジャーナリストのジェイコブ・リース (Jacob Riis) などの協力を得て約10万ドルの資金を集め、ニューヨーク市に社交を目的とした施設としてクリントン・ホールを1904年に建設した。この中にはレストラン、ピリヤード台、ボーリング・レーン、ダンスホール、会議室などが設けられ、20以上の労働組合は、そこを活動と交流の拠点として使用した<sup>46)</sup>。

また、酒場にとって、さまざまな意味で「ライバル」となる活動も始まった。ボストンでは「アトランティック・マンスリー」誌の編集者の妻で改革者のアニー・フィールズ (Annie Fields) が、酒場の代替施設として共同住宅地区に「コーヒーハウス」をいくつか開店させるために多くの時間とお金を費やした<sup>47)</sup>。また、女性キリスト教禁酒同盟は、テンペランスを促進するためにアルコール飲料の代わりに清涼飲料を販売する「ソーダ・ファウンテン」を各地に作る運動を開始したのである。

さらに、全国のレストラン経営者たちは、非衛生的だとしてフリーランチを攻撃し、その禁止を求めてそれぞれの都市の市議員に働きかけた。シカゴやボストンでは、最終的に1917年になってフリーランチが禁止されるのであるが、これは第一次世界大戦への参戦を期に食糧確保の一環としてとられた措置だった<sup>48)</sup>。それとは別に、職場の近くまで昼食を売りに来

るワゴンの出現、慈善事業による文字通りの無料ランチ支給、工場内にできた従業員食堂、そして妻が作るサンドウィッチ弁当などが、フリーランチの需要を縮小させたのである。

一方、時間の経過とともに移民労働者を取り巻く環境も変化した。入国直後の移民にとって、酒場が提供するさまざまなサービス、特に母国語で知らされる雇用情報などは必要不可欠なものであった。しかし、世代が変わり二世や三世は英語で意思の疎通が図れるようになり、また民族クラブなどの互助的友愛会も活発な活動を開始した。さらに、徐々にではあったが生活状況も改善されて、中には共同住宅が集中するスラム街から郊外の住宅地へ引っ越す者も現れるようになったのである。

19世紀後半のアメリカにおいて、中流階級以上の市民にはいろいろな社交の場が誕生した一方、労働者階級の人たちにとって、仕事が終わって就寝するまでの時間、もしくは休日の余暇を過ごす場所があまり存在しなかったことは、すでに述べた通りである。しかし、20世紀になるとシカゴやニューヨークのような大都会では、公園、図書館、公会堂、体育館などの公共施設が整備され、また娯楽も多様化し、遊園地、ダンスホール、映画館、野球場など民間の娯楽施設も整うようになり、それらは経済的に恵まれない人びとでも利用できた<sup>49</sup>。当時、映画館の入場料はフリーランチの値段と同じ5セントだったので、そこは「ニッケル・オデオン」と呼ばれ、労働者階級の人たちが観客の多数を占める娯楽の場になった。映画館をのぞいた他の施設はすでに19世紀後半に存在していたが、それらはすべて20世紀に入ってから際立って整備が進み、軒数も増えたのであった。このように、酒場を取り巻く状況が変化していくなか、それが以前果たしていた機能と役割の重要性は、相対的に低下したのである。

## おわりに

19世紀後半の酒場、特に移民労働者が多く集まる都会のそれは、彼らに

とって日々の生活をおくる上でなくてはならない施設だった。これについては、当時過度の飲酒に警告を発していた改革者チェスター・ローウェル (Chester Rowell) でさえも、「酒場は人びとが本当に求めたものを提供していた」と述べている。また、ドライ派の立場にたつ「五〇人委員会」も、「ソーシャル・センターとして酒場は極めて重要であった」ことを認めている<sup>60</sup>。

しかし、閉鎖を要求して酒場へ押しかけたことを切っ掛けに組織された女性キリスト教禁酒同盟と、酒場の存在そのものを否定する反酒場連盟を中心に進められた禁酒法運動の主流派は、そのような点に配慮することはなかった。彼らは、酒場はすでに改善できないほど悪徳と結びついていると訴えることで支持を拡大したのだが、現実には世紀転換期にいたるまで健全な店が多かったのである。

社会学者でありシカゴのハル・ハウスで活動するソーシャル・ワーカーでもあったアーネスト・ムーア (Ernest Moore) は、調査によって問題となる酒場は一部に過ぎないことが確認されたとして、「それを一般化することは正当な扱いではない」と警告している<sup>61</sup>。実際、酒場を容認することはできないとする考え方が、19世紀中に世論を支配するところまで高まることはなかった。1900年の時点でメイン、カンザス、ノースダコタ、ニューハンプシャー、ヴァーモントの5州で禁酒法は成立していたが、1903年にはニューハンプシャーとヴァーモントのそれは廃止されたのである。

しかし酒場は、さまざまな娯楽を提供する新しい施設が出現するなか、過当競争の時代に突入していた。ドライ派が進めたハイライセンス運動が、酒場の醸造業者による系列化を促し、皮肉にも店舗数を増やす結果を招いたことはすでに論じた通りである。かつて、アメリカへ移民してきた労働者にとって「荒波の中で出会った灯台」だった酒場は、自らの生き残りをかけて利潤第一主義を掲げたことで問題化し、新移民が急増する中で激しくなった文化戦争においてドライ派の標的となるのであった。

## 註

- (1) 酒場を改革すべき対象とした研究、つまり禁酒法運動を肯定的に捉えた研究は数多くなされてきたが、以下にその一部を挙げてみる。John M. Barker, *The Saloon Problem and Social Reform* (1905; reprint, New York: Arno Press, 1970); Ruth Bordin, *Woman and Temperance: The Quest for Power and Liberty, 1873-1900* (Philadelphia: Temple University Press, 1981); James H. Timberlake, *Prohibition and the Progressive Movement, 1900-1920* (New York: Atheneum, 1970).
- (2) Thomas Pegram, *Battling Demon Rum: The Struggle for a Dry America, 1800-1933* (Chicago: Ivan R. Dee Publisher, 1998), 96.
- (3) Alan Brinkley and others, *American History: A Survey* (New York: McGraw-Hill, 1991), 541.
- (4) Jack Blocker Jr., *American Temperance Movement: Cycles of Reform* (Boston: Twayne Publishers, 1989), 68.
- (5) Perry Duis, *The Saloon: Public Drinking in Chicago and Boston, 1880-1920* (Chicago: University of Illinois Press, 1983), 48.
- (6) John Koren, *Economic Aspects of the Liquor Problem* (1899; reprint, New York: Arno Press, 1981), 232.
- (7) Norman H. Clark, *Deliver Us from Evil: An Interpretation of American Prohibition* (New York: W.W. Norton & Co., 1976), 50; W.J. Rorabaugh, "Estimated U. S. Alcoholic Beverage Consumption, 1790-1860," *Journal of Studies on Alcohol* 37, no. 3 (1976): 361.
- (8) Koren, 210.
- (9) Norman H. Clark, *The Dry Years: Prohibition & Social Change in Washington* (Seattle: University of Washington Press, 1965), 55.
- (10) T.D. Stiles, "Comments on Prohibition by Lumberman and Miner," *Annals of American Academy of Political and Social Science* CIX (1923): 130.
- (11) Andrew Barr, *Drink: A Social History of America* (New York: Carroll & Graf Publishers, 1999), 376-7.
- (12) Ernest S. Griffith, *A History of American City Government: The Progressive Years and Their Aftermath, 1900-1920* (Washington, D. C.: University Press of America, 1983), 276; The Vice Commission of Chicago, *The Social Evil in Chicago* (1911; reprint, New York: Arno Press, 1970), 125; United States Brewer's Association, *Proceedings of the 49th Annual Convention* (Atlantic City, N. J.: 1909), 121.
- (13) Andrew Sinclair, *Prohibition: The Era of Excess* (Boston: Little, Brown and Co., 1962), 77.
- (14) Upton Sinclair, *The Jungle* (1906; reprint, Chicago: University of Illinois Press, 1988), 79-80.
- (15) Kym S. Rice, *Early American Taverns: For the Entertainment of Friends and Strangers* (Chicago: Regnery Gateway, 1983), 86.

- 15) Royal L. Melendy, "The Saloon in Chicago (Part 1)," *American Journal of Sociology* 6 (1900): 297.
- 17) Jon M. Kingsdale, "The 'Poor Man's Club': Social Functions of the Urban Working-Class Saloon," *American Quarterly* XXV (1973): 477.
- 18) Madelon Powers, *Faces along the Bar: Lore and Order in the Workingman's Saloon, 1870-1920* (Chicago: University of Chicago Press, 1998), 212.
- 19) Melendy, 295.
- 20) Sinclair, 77.
- 21) Powers, 215.
- 22) 例えば20世紀初頭、11時間以上の労働が予定されている場合、5人に1人は就業前に酒場で飲酒した。Eugene J. Benge, "The Effect of Prohibition on Industry from the Viewpoint of an Employment Manager," *Annals of the American Academy of Political and Social Science* CIX (September 1923): 110.
- 23) Kingsdale, 475; Duis, 105-6.
- 24) Clark, *The Dry Years*, 56.
- 25) Pegram, 104; Barr, 379.
- 26) Koren, 216.
- 27) John A. Garraty, *The New Commonwealth, 1877-1890* (New York: Harper and Row, 1968), 202; Oscar & Lilian Handlin, *Liberty in Peril, 1850-1920* (New York: Harper Collins Publishers, 1992), 193.
- 28) Jack London, *John Barleycorn* (Curtis Publishing Company, 1913), 206-208, as quoted in Gilman M. Ostrander, *The Prohibition Movement in California, 1848-1933* (Los Angeles: University of California Press, 1957), 79.
- 29) Larry Engelmann, *Intemperance: The Lost War against Liquor* (New York: Free Press, 1979), 4; Kingsdale, 476.
- 30) Duis, 121.
- 31) Catherine G. Murdock, *Domesticating Drink: Women, Men, and Alcohol in America, 1870-1940* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1998), 76.
- 32) Powers, 44.
- 33) *Ibid.*, 42 & 65.
- 34) Committee of Fifty, *The Liquor Problem: A Summary of Investigations, 1893-1903* (1905; reprint, New York: Arno Press, 1970), 158ff.
- 35) Nuala M. Drescher, "Organized Labor and the Eighteenth Amendment," *Labor History* 8 (1967): 281; Powers, 55; Duis, 76.
- 36) Powers, 179.
- 37) Barr, 139-140.
- 38) *Chicago Tribune* (Illinois), March 10, 1908.
- 39) 政治・社会浄化については、拙著「アメリカ禁酒運動の軌跡—植民地時代から全国禁酒法まで—」(ミネルヴァ書房、1994)の第八章を、また産業の効率化については、

拙稿「『高貴な実験』の再評価—大衆消費社会出現との関連において—」『同志社アメリカ研究』別冊15 (2000)、151-71 を参照されたし。

- (40) 課税額は、当初蒸留酒 1 ガロンあたり25セントだったが、終戦時には2ドルまで跳ね上がった。その後1875年には90セントまで下げられたが、1898年の米西戦争勃発後は1ドル10セントへと再度変更された。一方醸造酒——主にビール——は、1バレル(31.5ガロン)あたり1ドルと固定された。Daniel J. Whitener, *Prohibition in North Carolina, 1715-1945* (Chapel Hill, N.C.: University of North Carolina Press, 1945), 51.
- (41) Griffith, 278; Frank W. Alduino, "The 'Noble Experiment' in Tampa: A Study of Prohibition in Urban America," (Ph. D. Diss., Florida State University 1989), 75 & 92.
- (42) 例えば、1907年のシカゴ市では約80パーセントの店舗が、また1908年のニューヨーク市では80~85パーセントの店舗が特約酒場だった。Kingsdale, 474.
- (43) Becky Smith, "Prohibition in Alaska: When Alaskans Voted 'Dry'," *Alaska Journal* 3 (1973): 175.
- (44) Sinclair, 75.
- (45) Duis, 108.
- (46) Allen F. Davis, *Spearheads for Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement 1890-1914* (New York: Oxford University Press, 1967), 82.
- (47) もともと、コーヒーハウスのアイデアはイギリスから「輸入」されたもので、アメリカでは1871年の大火の直後のシカゴで、禁酒法運動の活動家が荷馬車でコーヒーを売り歩くやり方で始まった。仕事を終えた労働者が工場を出ると、そこにコーヒーワゴンが待ち構えており、一部ではあったが酒場へ向かう者の足を止めた。1880年代にはワゴンは消えはじめ、コーヒーハウスは通常の店舗として営業するようになった。Duis, 197-98; Handlin, 193.
- (48) Duis, 296-7.
- (49) Committee of Fifty, 168-70.
- (50) Ostrander, 79; Committee of Fifty, 148.
- (51) Koren, 213.

## The Rise and Fall of the American Workingman's Saloon, 1870-1920

Masaru OKAMOTO

There have been a lot of studies on the prohibition movements in the United States by many pro-prohibition (dry) historians. In these writings the places where liquor was sold—mostly saloons—tend to be treated negatively as “a den of vice,” because they were linked to gambling, smoking, and prostitution as well as binge drinking. Moreover, they were also thought to be evil because they had become bases for machine politics. Many saloon owners were elected to be aldermen by ethnic voters, and some of them became “precinct bosses” who assisted opponents of prohibition aspiring to higher public office by gathering votes at their saloons. If such a candidate won an election, he would then distribute many public jobs such as those in police and fire departments through “precinct bosses.” This activity was regarded as political favoritism and corruption by contemporary prohibition advocates. “Saloons must go” they concluded.

Actually, after the turn to the 20th century, saloons got more involved in various kinds of social evil to survive under excessive competition, which inflamed many people. Consequently, the prohibition movement led by the Anti-Saloon League focused its attack on saloons. Prohibitionists finally succeeded in persuading many middle-class Americans of the necessity of a national prohibition law, which destroyed legal saloons in 1920.

However, the contribution of saloons in big cities to the people living on adjacent streets has not been discussed thoroughly. The scarcity of historical materials on the workingman's saloons explains this partially. Working-class bargoers seldom recorded their thoughts and experiences for posterity. As a result, while "dry" historians have produced many fine studies of the prohibition movement, "wet" counterparts tend to avoid such controversial places as saloons. Instead, they refer to such "side effects" of the prohibition law as waves of crime, the general tendency to disregard laws, and the illegal production and importation of liquors.

Until the late in the 19th century, however, most saloons were in fact much more wholesome than those in the early 20th century. These "poorman's clubs," as they were often called at the turn of the century, were frequented mainly by laborers, many of whom were newcomers from the same ethnic background as the owners of the saloons. Light diversion was not the only reason that customers frequented saloons after a long day of hard work. Saloons were indispensable for them in many other ways.

The newcomers gathered there to seek someone to help find places to stay and jobs to make money, while speaking to other patrons in their own languages. They provided laborers with "free" lunch at a very low price. They also provided "back rooms" for labor union's meetings, and other social events like wedding receptions. Furthermore, they also acted as bank, post office, and so on for the convenience of the customers. In this paper I discuss the function of the neighborhood saloons like these, revealing the other side of the story, the working-class drinkers' side. And also I explain why such saloons became a fading industry early in the 20th century.